

女子部

「女子部」に対する違和感

津田塾大学 稲葉 利江子

「ガラスの天井指数」をご存じだろうか。これは、今年（2015年）の3月8日の国際女性デーに、英国エコノミスト紙が発表したものである。この指数は、職場での男女平等度を、高等教育を受けた男女比、労働参加率、男女の賃金格差、高位職進出比率などをもとに算出したものである。「ガラスの天井」とは、性別や人種などを理由に組織内で昇進できない状態である「glass ceiling」のこと。女性の社会進出が本格的に始まった1980年代から使われるようになったキャリアアップへの見えない天井のことを意味する。我が国は、OECD加盟国で算出可能な28カ国中27位という驚くべき結果であった。我が国の特徴は、女性労働参加率が30代で低下するM字カーブを描くことと、女性の高位職進出比率が低いことが考えられる。管理職の割合で捉えると、17位の米国が43%であるのに比較すると、11%にとどまっており、能力や経験のある女性が昇進できる仕組みづくりが急務であることがうかがえる。

女子部の原稿依頼を受け、今一度、自分なりに男女共同参画について、考えた。2003年から2年間、応用物理学会で男女共同参画委員会の委員をさせていただいていたころから、私自身、多少の違和感を感じていたからである。「会員の広場」での「女子部」に関しての意見に触れ、おそらく同じような違和感を感じている人も少なからずいるのではないだろうか。かつて、私が所属していた前述の委員会では、女性だけを特別視するのではなく、性差なく、機会や環境が平等であるための環境整備が重要であろうと議論がなされた。そもそも、理系を思考する女性が少ない中、

理系女子を増やす政策が必要であるかと問われると、私自身は、男女関係なく、やりたいことが選択できる環境が整備されることが大切であると考えている。

それでは、上記のような環境整備だけをすればいいのだろうか。私は不十分だと考えている。Facebook COOのSheryl Kara Sandbergや女優Emma Watsonの書籍やスピーチの中で、女性の無意識な考え方に問題があるという発言などで注目された「詐欺師症候群」という概念がある。女性は、男性と比べ、自己評価が低く、仕事で高い評価を受けても、「周りの人のおかげ」「実力ではない」「いつか自分には力がないことがばれてしまうのでは」と不安を感じてしまうことが多いらしい。LEAN INでSandbergは、「女性が仕事上で控えめに振る舞おうとするのをやめるべきだ。強引に割り込め。もっと大胆に挑戦せよ」と主張している。環境整備だけではなく、女性の内なる革命も非常に大切なかもしれない。

今一度、男女共同参画の在り方を考えると、やはり、「上位職への女性の登用を〇%に」というのは、結果であるべきであり、目標値にすべきではないと思う。そして、環境整備にしる、意識にしる、性別や人種などによらず、選択の自由があるべきであると思う。まだ、社会の中にそのような基盤が十分に築けていないのであれば、このような女子部においてこそ、女性も男性も「ガラスの天井」という言葉が打ち砕かれる世の中になるよう、意識改革のきっかけになる発信をしていく必要があるのではないだろうか。

.....